



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

主日の説教

今日のみことば

年間第20主日 C年 (2022年8月14日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 38章4—6、8—10節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 12章1—4節

福音朗読：ルカによる福音書 12章49—53節

平和とその仲介者

第一朗読の理解を深めるために歴史的な背景について知る必要があります。歴史を詳しく見ると、バビロン捕囚は二度ありました(紀元前597年と587年)。二つの捕囚の間にバビロニアによって南ユダ王国の王に立てられたのがゼデキヤ王です。二度にわたる捕囚の間の10年は反バビロン派と親バビロン派とで南ユダ王国の世論は二分されていたのです。

当時の中東の覇者であるバビロニアは、カルデア人の軍隊を使ってエルサレムに侵攻しようと包圍していました。しかし、南からエジプトのファラオの軍隊がそれを阻止するために北上してきました。南ユダ王国は両大国に挟まれたわけです。ゼデキヤ王はどちらに組みするか決断を迫られていましたが、優柔不断でした。

その頃、預言者エレミヤは故郷アナトトに土地の相続のために帰ろうとしてエルサレムの町を出ます。それがバビロンへの投降と見なされて、書記官ヨナタンの家の丸天井の地下牢に監禁されます(エレ37章1-17節参照)。反バビロン派の仕業です。ゼデキヤ王はエレミヤを宮殿に連れてきて監視します。「監視の庭」に入れられ、毎日パン一個のみ与えられました(18-21節参照)。エレミヤはひるむことなく語ります。「この町に留まるものは、剣、飢え、疫病で死ぬ。だが、カルデア人の所に出ていく者は生き永らえる……主はこう仰せになる。この町は必ずバビロンの王の軍隊に渡され、王はこれを取る」(38章2-3節 フランシスコ会訳)。これを聞いて宮廷の高官たちはエレミヤを殺すことを進言します。ゼデキヤ王は反論できず、エレミヤは水溜めの中に綱で下ろされてしまいます。そこには水はなく泥だけでした(4-6節参照)。エレミヤは泥の中で飢え死にを待つだけでした。今日の第一朗読は、こういった預言者エレミヤの絶体絶命の場面からです。

第二朗読は省いて福音朗読に移りましょう。

イエスさまのエルサレムへと向かう旅の記事(9章51-19章27節)の中で、特に12章ではお弟子さんたちのあり方が説かれています。

51節の「平和」に注目してください。『ルカによる福音書』には「平和」(ギリシア語はエイレネー)ということばが何度も登場します。特にここでは、イエスさまが語る平和をあげてみましょう。

- ①「あなたの信仰があなたを救った。安心(エイレネー)して行きなさい」(7章50節)
- ②「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心(エイレネー)して行きなさい」(8章48節)
- ③「どこかの家に入ったら、まず『この家に平和(エイレネー)』と言いなさい」(10章5節)

これらの例からイエスさまが「平和」を望んでいたことは確かです。しかも、貧しく、父なる神さまに頼らなければひとときも生きることでできない人々にこそ「平和」があると考えていたのでしょう。上にあげた①と②から、この「平和」は信仰を前提としています。そして、③によれば、信仰に基づいて生きる人々、すなわちお弟子さんたちは、「平和」をもたらず使者となります。

今日の福音で、「わたしは地上に火を投ずるために来た」(49節)とイエスさまがおっしゃいます。地上には不信仰が蔓延しているのです。不信仰のもとでは、イエスさまが「平和」を説き、「平和」を生きたとしても、「分裂」しか生じないのかもしれない。

【ちょっとひと言】

今日の第一朗読と福音朗読との関わりが分かりにくいように思います。二つの理解の可能性を示してみましょう。

4節にある「この民のために平和を願わず、むしろ災いを望んでいるのです」は最初の手がかりとなるでしょう。エレミヤがバビロンへの投降をしようとしていたと考える反バビロン派の立場は、バビロンとの徹底抗戦です。彼らは奇跡的な勝利があるだろうと信じていました。しかし、その態度は自分たちの保身のためだったのです。もし、負けを認めたら、すでにバビロンに投降したユダヤ人たちによってひどい目に遭わされるのではないかと考えたからです(38章19節参照)。

ですから、「この民のために平和を願わず」は嘘に満ちた表現だと思えます。エレミヤと敵対する人々が考えている平和とは、自分たちの身の安全を確保するための平和だったのでしょう。イエスさまが考えている「平和」と、わたしたちが考えている「平和」とには隔たりがあるのではないのでしょうか。上に指摘しましたように、信仰を前提にしなければ真の「平和」は訪れないのかもしれない。

もう一つの手がかりとなるのは、8節に登場する「エベド・メレク」です。第一朗読では省かれた7節に次のようにあります。「クシュ人の宦官エベド・メレクは、彼らがエレミヤを水溜めに入れたことを聞いた。その時、王はベニヤミンの門の所に座っていたので」（フランシスコ会訳）。ちなみに「クシュ人」とはエチオピア人を指すと考えられます。「エベド・メレク」とは「王の僕」という意味だそうです。

エベド・メレクは唐突に登場する人物ですが、彼の仲介でエレミヤは絶体絶命の状況から解放され、ゼデキヤ王ともう一度相まみえます。そして和平への道が始まります。

「平和」の実現のためには「平和のための仲介者」が必要なのです。自らの力では「平和」は実現不可能なのです。まさに、イエスさまは「平和のための仲介者」としてこの世に來られました。そしてこの仲介者はエベド・メレクとは違って、自分自身のいのちをささげることで「平和」を実現する方だったのです。



「キリスト降架」ピーテル・パウル・ルーベンス (1611年 - 1614年)